たまぞの

第154号
令和７年３月１日発行
発行所／一般社団法人
長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
TEL 095-824-5494
発行人／安部 和隆
印　刷／株式会社 岩永印刷所

巻頭言　～学校は子どもの行きたいところでありたい～

教育学部教授　木村 国広

表題は，教員としての私の最大原則である。

ここでいう「原則」とは，教員としての視座，判断の拠り所という意味をもつ。若いときは若いなりの，キャリアを積めば積んだなりの「原則」を持つことを大切に，私はその道を歩んできた。

この稿では，私の43年間の教職生活，その折々のささやかな「原則」10選を紹介させていただく。

皮切りは教諭時代の原則を２つ。

①授業は誰もが走れる100m

運動会のかけっこをイメージしていただきたい。全員がゴールを目指してスタートラインに並ぶ。一人一人の子どもが走るスピードは異なるが，全員がゴールするまでみんなで見守り応援する。若い頃はそんな授業がしたいと心に誓っていた。

②気づけば動ける

場面は学級経営である。子どもたちが帰った教室で一人ずつ呼名することを日々の習いとした。呼名すると，その日の様子が思い浮かぶ子どもとそうでない子どもがいることに気づく。思い浮かばなかった子どもには次の日一番に声を掛けた。

次は，行政で生徒指導担当だった頃の原則。

③子どもの人生は出会った大人で決まる

中心的業務は児童生徒に係る事件事故対応。子どもの命が失われることの悲しみの大きさに何度も身が震えた。併せて，たくさんの子どもたちが教職員の献身的な支えに救われていることも知った。教職員の存在の意味に身が洗われた。

事件事故対応では，初動の大切さが身に沁みた。その時の原則が**④急がば回るな**，**⑤できるのにやらないことが一番やってはいけないこと**である。

３番目に校長時代の原則。

⑥中島みゆきのように

♪君が笑ってくれるなら僕は悪にでもなる～♬　子どもたちや教職員のためになると思いついたことは，どんなことでも実行すると決めた。

⑦姿で語る管理職

「言うは易く行うは難し」である。学習指導や生徒指導，保護者対応や地域協働，教職員に伝えたいことには自らの行動を添えるよう心掛けた。

最後は，義務教育課から今に至る原則。

⑧人は不完全なまま完全

キャリアを積めば積むほど知らないことの多さに慄き，己の未熟さを恥じた。そんなある日，憧れの先輩の姿を通して，人と比べるのではなく，なりたい自分と比べることの大切さを知った。なりたい自分への劣等感は健全な劣等感である。

⑨言葉に体温を乗せる

言葉の力の大きさを知り，身に付けたいと願い続ける教職人生でもあった。体温が乗った言葉こそが人の耳目を引っ張ると自覚し，言葉は，彫るように読み，石に刻む思いで書くと肝に銘じた。

⑩学校は子どもの行きたいところでありたい

学校は楽しいばかりではない。我慢が必要なこともあれば，思い通りにならないことだってある。だからこそ，子どもにとっては，常に安心して過ごせ，やりたいことに挑戦できる，また大いに失敗もできる居場所であってほしいと心から望む。

「原則」とは，各々の時代に辿り着いた私なりの教員としての本質であったと思う。あなたの「原則」は何ですか。

目　次

P１	【巻頭言】	木村 国広
P２,３	【実践報告】	古本 龍夫，高田 敏彦
P４,５	【現職教員の声】	石橋　享，本村 孝之，橋口 梨沙，谷口 紗里奈
P６	【県外からこんにちは！】	松尾 真太郎，三隅 昭二
P６	【私も頑張っています！】	藤田 克祐，小林 和正
P７	【母校だより】	藤本　登
P８	【事務局だより】	

実践報告

「貫くもの」～短歌と色紙と通信と～

古本 龍夫（H元年卒・鳴見台小学校長）

今年度教職36年目を迎え，校長として，３年間，長崎市立鳴見台小学校に勤務できたことは私にとって誇りである。平成元年に長崎市立戸町小学校に勤務してから36年間私の教職人生を貫いてきたものは何だろうと振り返った。

それは，遡って教育実習で１か月間学んだことを一貫してやってきたことだと気づかされた。

教育実習は，長崎大学教育学部附属小学校６年２組倉田登勝先生のご指導だった。子どもたちと担任の関わりの姿を見て，強く教師になりたいと思ったことを覚えている。まさに，私の教師道の原点だと言える。実習時６年生が１年生と遊ぶ姿を見て短歌を詠んだ。次の２首である。

弟や妹たちと手をつなぎ遊ぶ姿は輝きて見ゆ

教室で小さく見ゆる子どもらも
遊ぶ姿は大きいリーダー

担任の倉田先生は，私が詠んだ短歌を子どもたちに紹介してくれた。

学級目標は，「この一歩もう一歩」「動と静」「大きいリーダー」の３つを掲げられていた。

この学級目標も時々真似させていただいた。

何よりも教育実習の最後に，倉田先生から授業の様子を写真に撮った色紙を贈っていただいた。

この色紙をいただいたことがとてもうれしかったこともあり，初任で５年生の担任をし，持ち上がって６年生担任をした最初の教え子の卒業の時には，この約12cm×12cmの色紙に子ども一人一人への短歌を詠んで，南画の得意な先生に絵を添えていただき贈った。

思えばずっと36年間この色紙を贈ることを貫いて続けてきたように思う。時として，それが，短歌ではなく，短い言葉や将来の夢など受け持った学年や対象によって多少の違いはあったが，贈り続けてきた。

長崎市教育委員会勤務の時は，ありがたいことに５年目研修を担当させていただき，そこで代表授業をされた先生には，写真を添えて，短歌を詠んで贈るようにした。管理職になって，校内研や初任研などで授業をされた先生にも同様の色紙を贈り続けてきた。

贈られた子どもたちや先生方の何かの力になればと願って贈らせていただいているが，私の自己満足なのかもしれないと思うことも多々ある。続けてきた原点に倉田先生からいただいた色紙に感動した経験があり，たゆまず続けてきたのだと思う。

今となってみれば，教育実習での経験や体験，学びは，教員人生を左右するのだと思えてならない。心の底から教員になりたいと思えたことが根底にあり，これまで貫かれているものだと確信している。

教育実習の記録

H17年度学級通信

もう一つこだわって続けてきたのが，「学級通信」である。学級通信は，保護者へ学級の様子を知らせる重要な手段の一つだと思っている。初任のころは，手書きだったが，次第にワープロやパソコンで作成するようになった。２校目橘小では，「先生の日記」と題して毎日書くことにも挑戦したことがある。220号ぐらいまで続けた。この時は，子どもたちからサプライズで，100号や200号の時にお祝いをしてもらった。主に，文章だけのＡ４判用紙一枚程度の学級通信でも印刷したものを毎日綴じて今でも大切に保存している教え子もいる。同窓会で学級通信の話題になることがとてもありがたくうれしく思える。続ければ，本物になる。本物であれば，続く。私にとって，教職36年間を貫くものは，「短歌と色紙と通信」である。教育実習で学んだことが，原点となりこれまで一貫してやってきたことが，自分の核となっていて，幹となっている。これまで，８つの小学校と市教委に勤務してきたが，「短歌と色紙と通信」は，貫くものとなっている。

そして，今，最後の色紙づくりに取りかかっているところである。６年生担任に了承を得て，卒業生一人一人に，短歌を詠み，それを色紙に墨書して贈る準備をしている。校長として３年間させていただいている。卒業生の行く手に幸多からむことを切に願っている。

実習で学びしことを礎に
教師の道を歩んできたかな

卒業す子どもへ贈るお祝いの
短歌（うた）を色紙にしたためるかな

悩み続ける教師集団でありたい

高田 敏彦（Ｈ５年卒・長崎大学附属幼稚園長）

秋の紅葉シーズン。登園時にきれいな色の落ち葉を拾ってきたＡ児。

Ａ児：「見て。赤と黄色の葉っぱ。きれいでしょ。」
担任：「とてもきれいな色だね。」
Ａ児：「うん。朝，お母さんと見つけたの。」
担任：「どこで見つけたの？」
Ａ児：「幼稚園に来るときの道だよ。今日，みんなに話したい。」
担任：「みんなに話してね。」

この後，Ａ児は降園前にとても嬉しそうに落ち葉のことをみんなに伝えました。学級の子どもたちは，「見たことある。」「僕も，幼稚園に来るとき見つけたよ。」「たくさん落ちてるもんね。」「明日，持ってくる。」とそれぞれが自分の思いを生き生きと口にしていました。その様子を見た担任は，翌日Ａ児以外の子どももきっと落ち葉を拾って持ってくるだろうと予想し，紅葉する「葉っぱの種類」や「色の変化」について載っている図鑑を保育室のテーブル上に広げて置いておきました。翌日の登園時に紅葉した落ち葉を拾ってきた子どもたちは，図鑑の写真と照らし合わせながら「この色だね。」「これ，ナンキンハゼっていうんだ。」「これはサクラ？」「この茶色はクヌギって書いてる。」とつぶやいていました。

本園は，令和３年度から「『したい　知りたい　やってみよう』を育む環境構成と教師の援助」を研究主題に，子どもの主体性を育むための保育を研究してまいりました。上記は，子どもの興味や関心を担任が察知し，翌日子どもたちがさらに主体的に『したい　知りたい　やってみよう』を実現できるように環境を構成した一場面です。

今年度は，文部科学省「幼児教育の学び強化事業」において「教育課題に関する調査研究」の委託を受けることになりました。研究課題は，「遊びにおける幼児の主体性と保育者の意図のバランスに関する研究」です。昨年度までの研究で，子どもの思いを大切にした子どもスタートの保育だけでなく，教師の思いやねらいをもとにした教師スタートの保育も子どもの主体性を育むうえで大切ではないかと感じるようになりました。これまで，子どもの主体性を重んじるがあまり教師の思いを伝えることに躊躇してしまっていたためであると思います。

しかし，教師のねらいや思いを出し過ぎて子どもの思いを誘導したり，教師主導で保育を展開したりすることは，主体性を育む保育とは言えません。逆に，子どもの興味や関心，思いや考えを優先するあまり教師が見守るだけだったり，任せっぱなしになったりすることもより良い保育とは言えません。このようなことから，子どもの思いと教師の思いがバランスよく絡み合ったとき，子どもの主体性を育むより良い保育が行えるのではないかと考えました。

さらに，委託調査研究を通して我々は，「悩み」や「迷い」が教師の資質を向上させるうえでとても大切なことであるということを学びました。幼児教育に限らず全ての教師は，子ども理解をベースに保育や授業を仕組んだり，指導や援助等を行ったりします。その中で，常に「悩み」や「迷い」が生じ，それを解決する方策を思案し，試行錯誤を繰り返しながらその都度ベストを尽くします。自力解決が難しい場合は，同僚や上司等の仲間に相談しながらより良い方策を講じます。これら一連の流れを繰り返すことで，教師としての資質や力量が磨かれていきます。

今日も，「おいしそうなケーキをつくりたい。」「この虫は何ていう名前か図鑑で調べてみよう。」「ジャングルジムの上まで登れるようにがんばろう。」などの声がたくさん聞こえます。教師からは，「保育室の環境構成はこれでよかったのか。」「言葉かけの内容やタイミングはどうだったか。」など自問自答したり振り返ったりしていることが保育記録や職員室での会話からわかります。本園の教師は皆，子どもの主体性を育むために悩み続ける教師集団でありたいという強い思いを抱きながら，日々の保育に臨んでいます。

現職教員の声

「書くこと」が拓く未来

石橋　享（Ｈ８年卒・田河小学校長）

大学を卒業して早29年。故郷の空の下，子どもたちに携われる喜びと責任を感じながら，目尻にしわを刻む日々を送っています。この間，様々な場所で多くの人と出会い，教育者としてのあるべき姿を学んできました。いくつもの挑戦と失敗を繰り返し，学校を任せられる立場となった今，根底に強く抱くのは「子どもたちに自分の手で未来をつかみ取るための学力をつけたい」という思いです。島で生まれ育った私なりに，島の子どもたちや島の未来に思いを馳せ，至った思いです。島をズームアウトすれば，人口流出が続く本県に置き換えられます。

本校が子どもたちに身に付けさせたい学力とは「課題解決力＝論理的思考力」です。このことは，本校の人材育成の視点でもあり，大人にも必要な力と考えています。社会基盤や人の生き方が複雑化・多様化する中で，進むべき道を人に委ねる生き方では，自分や自分の周りの人を幸せにすることはできません。目標達成のために，根拠を基に自らが進むべき道を決断できる人材を育てたいという願いがあります。

本校の研究主題は「算数科における論理的思考力を育成する授業の追究」です。一貫した問題解決的な学習の中で，子どもたち自身が学習問題から「課題」を立てます。一人一人が解決への「見通し」をもった上で，「一人調べ」へと移り，ここでの取組に本校の特色が出ます。答えを導き出して終わりとせず，その後の説明のために，自分の考えを一言一句書くのです。これは頭の中にある思考を言語化することで可視化し，書き言葉や話し言葉を通して，論理性や表現力を磨くためです。この手法を始めて以来，子どもたちの伸びは目覚ましいものがあります。全国学力学習状況調査の算数は，全国平均を10点以上上回っています。徹底して書いたことは，算数以上に国語力を高めています。書いたことで発表へ勇気をもち，授業での活躍を味わった子が「算数が好きになった」「授業が楽しい」と言い始めました。ただし，この陰には書くことが苦手な子を書けるようにするための教師の地道な指導や支援の積み重ねがあります。

書くことで，理由を明確にしながら表現する力がつきます。根拠に基づく考え方は，課題を解決する力となり，未来を切り拓く力へと発展していきます。職員に対しても，書くことを通した資質の向上を促しています。大学時代，レポートが大の苦手だった私ですが，現在は書くことを中心に据えた学校経営に奮闘中です。

教頭となって取り組んでいること

本村 孝之（Ｈ９年卒・黒島小中学校教頭）

技術･家庭科の新任として，壱岐市に赴任したのが27年前。それから地元佐世保に戻り，新設校から大･中・小規模の様々な学校を経験し，昨年度，佐世保市立黒島小中学校に新補教頭として赴任しました。

さて，黒島小中学校は，佐世保市相浦港から12㎞フェリーで50分。人口400人程度の小さな島にあり，全校児童生徒12名の極小規模校です。多くの行事を地域と共催で進める地域と距離が近い学校です。

教頭として，特に力を入れていることは「地域連携」です。教科の一部を統合して「ふるさと黒島学」という教科を新設しています。多くの活動を系統的に９年間体験させ，「ふるさとを愛し，自ら未来を切り開く，黒島っ子の育成」を目標としています。地域との窓口になり連絡・調整・企画を行い，活動を進めています。近年，コロナ禍や地域の高齢化，教職員の働き方改革で，多くが規模縮小や廃止となっています。本年度，挑戦として，簡易的になっていたものや中止となっていたものの一部を島の皆さんが言う昔ながらの盛り沢山なものに近づける試みをしました。過疎化が進む地域に元気を，学校が中心となり盛り上げることが活性化の一助になると考えてのことです。まずは学校に多くの人を集めることができ，様々な「よかった」「楽しかった」を沢山いただきました。１年目は全く勝手がわからず，２年目になり教頭の仕事にも慣れて島の人たちとの交流も広がり役に立てたかと勝手に充実し，３年目は何をしようか考え中です。

この「玉園同窓会報」，ずっと読んでいます。その中でお世話になったり，関わりがあったりした人たちが「この人も長大だったのか」「〇〇先輩，懐かしい」，妻も長大出身なので「〇〇さん載ってたね」「何かまじめに書いとったね（笑）」等といろいろな縁を感じながら，皆さんの活躍・近況報告に力をもらっています。この度，そのお返しをと思い引き受けました。ご一読いただき，ありがとうございました。

私が大切にしていること

橋口 梨沙（Ｒ５年卒・奈留中学校）

教師になり，早くも２年が過ぎようとしています。大変なこともちろんありましたが，「教員になる道を選んでよかった」と思っています。私にとって，教員の道を選ぶことは自分への挑戦でした。私は人前で話すことが苦手だったため，そんな自分に教員は務まるのかという不安がありました。しかし，「人生一度きりだから挑戦しよう！」と思い，教員になることを決意しました。今では，「教員になってよかった」と心から思います。

４月当初，担任を持てる嬉しさと不安な気持ちを持って教員生活をスタートし，右も左もわからない状態でしたが，本当にこの２年間で多くの方に助けていただきながら成長することができたと思います。この２年間で大切にしてきたことを３つ述べたいと思います。

１つ目は，学級経営において生徒と関わる時間を多くつくることです。昨年から朝や昼休みの時間にはできるだけ教室に行き，生徒と関わる時間を多くつくるように心がけました。そうすることで，生徒の良さや交友関係について知ることができ，生徒理解に繋がりました。また，生徒の方から話しかけてきたり，相談をしてきたりと生徒との信頼関係を築くことにも繋がると思いました。

２つ目は，先輩の先生方からのアドバイスを真摯に受け止め，それらを生かすことです。現在，勤務している学校の先生方は，本当に親身になって教えてくれます。１年目の何もわからない私に失敗や間違いをしても，親身になって丁寧に教えてくれました。先生方からのたくさんのアドバイスのおかげで，２年目になり，自分なりの学級経営の仕方や授業の仕方が見えてきました。まだ確実なものになっているとは言えませんが，これからも多くの先生方から学びながら，自分なりの教師としての姿を確立していきたいと思います。

３つ目は，授業の導入を楽しいと思わせるように工夫することです。導入で生徒の興味関心をひきつけることで，その時間の授業への取り組む姿勢が変わってくるため，意識して楽しい導入をするよう心がけています。まだまだ未熟な部分が多いため，これからも日々精進して頑張っていきたいと思います。

これらの３つのことを今後も大切にしながら，日々子どもたちと楽しみながら過ごしていきたいと思います。これからもさらなる向上を目指し，これまでの経験から学んだことを生かしながら，新しい試みにもチャレンジし，生徒たちと共に成長し続ける教育者であり続けるために，これからも努力を惜しまず，前に進んでいきたいと思います。

一年間を振り返って

谷口 紗里奈（Ｒ６年卒・有川小学校）

私は小学校教員としての一年目を迎え，日々多くの学びと成長を実感しています。この一年間，29人の子どもたち一人ひとりの個性を尊重し，信頼関係を築くことを最優先に取り組んできました。

まずは，授業の進行や指導方法について試行錯誤を重ねました。子どもたちが理解しやすいように工夫を凝らし，学びの楽しさを感じてもらえるように努めました。特に，算数や国語の基礎をしっかりと固めることができるように，視覚的な教材をできる限り用意したり，子どもの学校生活や地域と関連付けたりすることで，興味，関心を引き付けられるよう心掛けました。また，日々の宿題も重要な学習として，内容が個に合ったものになるよう心掛けました。働き始めたころは，宿題を丁寧に見る時間の余裕を作り出すことができず，管理職の先生や補助の先生にお手伝いいただくこともありました。ですが，先輩の先生から宿題の重要性を教えていただき，子どもたちが家庭で頑張って取り組んできたものを，担任として真剣にフィードバックすることが大切であるとわかりました。

そして，子どもたちとのコミュニケーションを大切にし，日々の会話やふれあいを通じて安心して学べる環境づくりを行いました。時には気持ちを伝える方法を一緒に考えたり，集団生活におけるルールやマナーを指導したりしました。何よりも，「安心して過ごせる学級」になるように，みんなと話をすることを心掛けました。

さらに，保護者との連携も意識しました。私のこれまでの経験や，昔，母に言われたことのある，「お家の人に自分から学校であったことを話してくれたら，とても嬉しい気持ちになるよ。」と言われたことを踏まえて，本人の良いところや，友達との関わりで困っていたことを話すようにしています。そうすることで，子どもたちの学びや成長を共有し，家庭でのサポートがどのようにできるかを一緒に考える機会を作りました。

一年目を振り返ると，まだまだ至らない点も多くありましたが，子どもたちの素敵な笑顔や，成長を見守りながら，日々の努力を積み重ねることの大切さを実感しています。先輩の先生方も，「今でも失敗することばかり。明日どうするか，どんな子どもになってほしいかを考えよう。」と声掛けをしてくださいます。今後も子どもと向き合うことを忘れずに，子どもの実態に合った指導ができるよう精進していきます。

県外から、こんにちは！

挑戦・創造・貢献

松尾 真太郎（H22年卒・筑波大学附属駒場中・高等学校）

長崎大学で過ごした４年間は今でも原動力になっています。附属小中学校での教育実習，長崎北高校へのインターンシップ，その他実習や研修，授業や部活動等どれも貴重な時間でした。

教員採用試験の時期，校種も教科も異なる玉園会の仲重利先生に，同郷というだけでいつも叱咤激励のことばをいただいたことに感謝しております。私公立高校に奉職後，現在筑波大学附属駒場中・高等学校（英語科）で教壇に立っています。小規模校ではありますが，中学１年生から高校３年生までの６学年が揃う国立大附属唯一の男子校は日々大変賑やかです。稲毛逸郎先生（英語教育），中村嘉男先生（英米文学），井上一郎先生（米文学），池田俊也先生（英文学），アントニー・ブラウン先生（英語教育），そして指導教官である松元浩一先生（英語学）に鍛えていただいた４年間のおかげで，今があります。学習指導要領改訂や教職を取り巻く環境変化が起ころうとも，学校生活や授業を通じて人間教育に携わることができる職業。この責任と喜びを忘れることなく，日々精進する所存です。

我が教員人生、全力投球

三隅 昭二（S 55年卒・小学校）

歴史と伝統に包まれた異国情緒あふれる街並み，そして魅力ある大学の校章（帆船）が，50年前の私を長崎（大学）に導いてくれました。

４年間の学びを終えて，昭和55年４月，地元山口県で新任教員スタート。実家から遠く離れた日本海側の漁村地域の小規模校で，スポーツが盛んな学校に赴任。軟式野球部で培った元気とパワーで，毎日早朝からの全力投球。

教材研究に研究授業，たくさんの校務分掌，子どもたちとの遊びや職員レク，放課後のスポーツ少年団，そして地域行事や社会体育など。

どの職場においても，土･日曜を問わず充実した日々を過ごしてきました。

そして，あっという間に40～50代を迎え，いろいろな立場になっても，常に子どもたちの健やかな成長を願っての学校経営でした。

退職後は「ふれあい教室（不登校生）」や「放課後等デイサービス」（発達障害生）」での勤務を経て，現在は「県の教育会，退職互助会，公務員連盟」のお手伝いをさせていただいています。

今後も，微力ながら子どもたちや教職員，地域・社会のために力を注いでまいりたいです。

私も頑張っています！

還暦過ぎてもまだ新米

藤田 克祐（S 53年卒・小榊小学校）

９年前に中学校を定年退職し，引き続き再任用で３年間中学校に勤務した。その後は親戚の誘いもあって，長崎を離れて介護施設で働いた。慣れない仕事と職場の人間関係に悩み，１年余りで退職して５年ほど前に長崎に戻ってきた。何か仕事はないかと探す中，目に留まったのが今の仕事（特別支援教育支援員）である。

学校に勤めていたので，その仕事内容はある程度は分かっていたつもりであるが，実際に始めてみると分からないことだらけ。毎日が手探りの状態。「この年になってまた新任を経験するとは?!」という感じである。「自分は役に立っているのだろうか？」と自問自答の毎日。現在４年目になるが，試行錯誤の日々は続いている。

しかし，最近になってやっとこの仕事に喜びを感じるようになった。毎朝玄関で迎える児童からのあいさつの声。私の支援を心待ちにしてくれる児童の言葉。学級の児童とのふれあい等。改めて教育現場で仕事ができることにやり甲斐と喜びを感じている。あと何年続けることができるかはわからないが，体が動く限り続けたいと思っている。

微力だけど思いを込めて

小林 和正（S 59年卒・西浦上小学校）

卒業して，40年余り。今でも，当時のゼミ仲間とは親交があり，学生の頃の出来事を語り合っては懐かしく思うとともに，かけがえのない仲間と出会えたことを幸せに感じています。

さて，長崎市立高城台小学校を定年退職後，初任者指導担当として24人の初任者と関わってきました。また，令和５年からは，玉園同窓会主催「教採セミナー」にも参加させてもらっています。「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が求められていますが，初任者の中には，「子供の学びの姿」と「それを実現する教師の働きかけの在り方」についてイメージすることができず，苦戦を強いられている先生もいます。このような経験から教採セミナーでは，採用試験合格は教員としてのスタートラインに立つことであり，その後どう走り続けるかが重要であることを伝えるようにしています。授業改善や集団作りを通して，子供たちに自己有用感を味わわせるとともに，価値ある「問い」を発して，子供たち同士のやり取りを楽しむ教員になれるよう，微力だけど思いを込めて関わっていこうと思っています。

母校だより

教育学部長　藤本　登

コロナ禍が明け，再開されたものや新たに根付いたものがある。再開されたものに国際交流があります。１月には平和・多文化センターと国際交流委員会が中心となって行われてきたI-STEP事業が再開され，韓国の漢陽大学校から15名の学生を受け入れ，附属小・中学校での授業参観や韓国の学生の授業実習等が行われる予定です。新たな取り組みとしては，９月にJICAのインドネシア国別研修「食育を通じた子どもの健やかな成長促進」が，13名の方を学部，附属学校，地域の農業法人等の協力を得て行われました。学校保健が専門の峰松和夫教授のコーディネートの下，中学校技術の栽培学が専門の鎌田英一郎准教授や附属小学校の栄養教諭一瀬美奈さん等を中心に研修が実施されました。インドネシアでは2025年１月から学校給食の無償化が始まります。現在，日本やインドの給食システムを参考に制度作りが進められており，食育教育をはじめとして，地産地消や道徳などの教育ツールとしての可能性に興味が持たれ，子どもの健康状態の改善に効果が期待されています。

JICA事業（附属小学校での食育研修）

さて令和８年度の概算要求が発表されました。教育学部関連で言えば，多文化社会学部，経済学部との３学部で構成される人文社会科学域から申請した『未来教育創造センター設置によるEdTechを駆使したSociety5.0牽引人材育成』に予算措置がなされ，２名の教員が新たに配置されました。これは高校の探究学習の改革支援をし，それに繋がる大学の基礎教育改革をEdTechにより進め，学内及び地域に還元することで地域の教育改革を先導することを目指しています。少子化と人口流出による学校の統廃合，教員の年齢構成や教員の働き方改革を進めるには，持続的な教員養成システムの構築とEdTechを活用した自律的で個別最適な学びを推進する授業づくりや教育環境の整備が必要であり，離島・へき地が多い本県とそこに所在する本学がその先導機関となることは必要不可欠と言えます。そこで地域と連携をして教員養成と教員研修の高度化を図ってきた本学部・教職大学院と専門学部が協働して新たな教員養成カリキュラムを構築することは，地域の教育課題の解決のために有意義なことであると考えます。本センターの成果は地域及び総合大学における教員養成の在り方を考える上で指標となることから，注目して頂きたい。

ところで前回書いた文部科学省の「地域教員希望枠を活用した教員養成大学・学部の機能強化事業」の採択が決まり，高鍋洋地域コーディネータを中心として活動を始めています。その中で，五島市，平戸市，松浦市，南島原市，新上五島町の教育委員会や中・高等学校の校長から地域の教育事情と教員希望者の状況を聞きました。その中で令和２年度から中学校教育コースで音楽・美術・技術・家庭専攻の募集を停止したことにより，本学ではこれらの教員になれないと間違った認識がなされていたことが分かり，コロナ禍での情報伝達の難しさがあったにせよ大いに反省すべきと考えています。この点の改善はもとより，さらに入試とカリキュラム改革を進めることで，受験者や学校現場が望む教員養成に近づけたいと考えています。まずは４月から２つの履修プログラム（離島教育と，技能系４教科）を開始するので，期待してもらいたい。

現在，運営費交付金が減少し，人件費削減＝教員定数の削減が進む中で，教育学部では教員数の維持や増加を目指すことが地域の教員需要に応える上で必要不可欠と言えます。先のJICA事業や概算要求の獲得も手立ての一つですが，附属学校の自立運営と教員の外部資金獲得や歳出削減は避けられません。国立大学は私立大学と違いコストパフォーマンスが悪いが，地域で必要とされる教育研究を進めるべきという考え方があるように，地域で求められる学部・大学院・附属学校としてその存在感を示すことが大切です。今年は長崎県で国民文化祭『ながさきピース文化祭2025』が開催され，被ばく80周年の年にあたります。教員・学生のみならず，同窓生，保護者，地域が一体となり知恵を出し繋がり合って，長崎の魅力や学びを外部に向けて発信できればと考えています。教育学部としても歴史を伝承し，平和教育を推進するために，同窓会の方々の思いや声をお聞かせいただけると有難く存じます。メールやお手紙，取材依頼，なんでも結構です。ご一報ください。

最後に，本学のみならず地域の理科教育や東日本大震災後の福島県川内村の教育にも貢献された星野由雅教授が，また大学と地域教育界の橋渡しと本学部・大学院の教育改革を先導された木村国広教授が退官されることを報告します。

事務局だより

事業等の募集

本会は，公益目的事業として，長崎県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に対する図書購入の助成，及び長崎県内の児童・青少年育成を目的とする事業への助成を行っています。

【図書購入費助成事業】

１．助 成 校：本県内，小・中・高・特支の各学校
２．助 成 額：１校につき５万円未満（４件程度）
３．募集期間：令和７年４月１日～６月３０日
４．応募手続き
①助成希望学校は本会事務局へ連絡
②希望校へ募集要項を送付
③希望校は申込書及び購入図書計画書を提出
④選考後，決定通知を送付
※応募先（本会事務局）
Email : inf@tamazono.net
Tel.&Fax. 095-824-5494

【児童・青少年健全育成助成事業】

１．対象事業
①児童及び青少年が参加して行う体験活動・発表会・展示会・伝統文化継承・社会貢献等の実践活動
②健全育成を目的として実施する，保護者・地域の指導者等の研修，学習活動
２．助成額：１件当たり５万円を上限として，総額20万円の範囲内で，対象とする事業の必要経費の概ね1/2を限度
３．募集期間：令和７年４月１日～６月３０日
４．応募手続き
①助成希望団体（希望団体）は事務局へ連絡
②希望団体へ，募集要項を送付
③希望団体は，申込書及び実施計画書を提出
④選考後，決定通知を送付

終身会員への変更について

ともに，終身会員として

令和６年度の定款改正により，現職，退職にかかわらず満６０歳を迎える年度以降に終身会費を納入していただくと，終身会員へ変更いたします。ぜひ，終身会員として，本会の進展にご支援いただければと思っています。本会の全ての事業は会費収入により賄われています。

終身会員への変更，どうぞよろしくお願いいたします。

登録は，ウェブで簡単にできます。
↓
https://forms.gle/VtB9zAxM5nXyF6hM9

※終身会費5,000円（登録時１回のみ）
支払いは郵便払込でお願いします。
ウェブで登録された方には郵送いたします。
お問い合わせ：TEL 095-824-5494
Email : inf@tamazono.net

お知らせ

物価高騰，発送代金等の値上がりにより，同窓会の運営が厳しくなっております。

現職会員のみなさまには，年間２回の会報「たまぞの」をお送りさせていただいておりますが，１月現在，約３分の１の所属機関からのご入金が未納となっておりました。

玉園同窓会存続のため，ぜひ会費を納入していただきますよう，どうぞよろしくお願いいたします。

玉園同窓会ホームページ
https://tamazono.net/

玉園同窓会 YouTubeチャンネル

事務局へのご連絡
・電子メール：inf@tamazono.net（常時）
・電話・ｆａｘ：095-824-5494（以下の時間帯）
曜日：火曜日，金曜日
時間：10時～14時30分
※不定期にお休みすることがあります。

題字：青嶋秋男